

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01226

研究課題名（和文）産業史的視点による日本映画史の再構築：1970年代の構造的変革についての共同研究

研究課題名（英文）Reconstruction of Japanese Film History from an Industrial Historical Perspective: Collaborative Research on Structural Change in the 1970s

研究代表者

谷川 建司（Tanikawa, Takeshi）

早稲田大学・政治経済学術院・客員教授

研究者番号：10361289

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：1960年代末～1970年代にかけては日本映画産業界にとって構造的変革期であり、既存邦画五社が衰退する一方、角川映画に代表される新規参入者により新しい才能が市場に出て活性化した。この変革期に映画業界に様々な立場に関わった当事者15名に対し共同インタビューを行なうことにより、古い時代の仕組みが滅ぶ一方で、旧体制の中で育った人材の技術力が新規参入者たちの映画作りで活用されていくダイナミズムを検証することが出来た。その成果は、インタビュー集『映画人が語る日本映画史の舞台裏【構造変革編】』（仮題）、論考集『映画の生き残り戦略 異業種参入・デジタル化・アーカイビング』（仮題）として刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大映の倒産・日活のロマンポルノへの転換に代表される1960年代末における古い日本映画界の衰退と、角川映画やサンリオの映画製作への進出に代表される1970年代初めの日本映画界の新しい動きについては、これまで日本映画史の言説の中でそれぞれの個別事例は語られては来たものの、二つの時期の継続性について積極的には評価されてこなかった。本研究計画では、こうした日本映画産業界の構造的変革期に様々な立場で映画界に拘っていた15名の映画人への共同インタビューを行い、技術革新により旧体制と共に滅んだ仕組みがある一方で、人的継続性が担保されたことでその後の新たな日本映画界への技術の継承が行われた事が確認された。

研究成果の概要（英文）：The period from the end of the 1960s to the 1970s was a period of structural change for the Japanese film industry, during which the five existing Japanese film companies declined, while new entrants such as Kadokawa Pictures entered the market and revitalized the industry.

By conducting joint interviews with 15 people who were involved in the film industry in various positions during this period of change, we learned that while the mechanisms of the old era are disappearing, new entrants are taking advantage of the technical capabilities of human resources cultivated in the old system. I was able to verify the dynamism that was utilized in the making of the film.

The result is a collection of interviews, "Behind the Scenes of Japanese Film History Talked by Filmmakers [Structural Change]" (tentative title), and a collection of essays, "Strategy for Film Survival: Entry into Other Industries, Digitization, and Archiving" (tentative title). To be published.

研究分野：映画史

キーワード：映画史 メディアミックス 異業種参入 ピンク映画 スタジオ・システム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、**2014**年から、国際日本文化研究センター(日文研) サントリー財団、京都大学人文科学研究所(人文研)とその財源を変えながら、継続的に組織・実施してきた研究会を母体としており、その着想の原点となった問題意識については首尾一貫している。即ち、日本の映画研究は美学・哲学・文学といった人文科学系研究者による映像・演出技法のテキスト・表象分析に偏り、映画を産業としてあるいは文化制度・文化政策・観客に対する効果といった社会科学的関心から研究対象として扱うアプローチが不足している、という現状認識がそれである。

わが国の映画研究がテキスト分析を中心としてきたのには、それがディシプリンとして確立するために不可欠の経路であったことは疑いないが、映画研究が学術研究として確立した今日においては、それを豊饒化させるためにもその偏りは是正される必要がある。

映画とは単に芸術家が作り出す芸術作品という側面だけでなく、収益を生み出すためのビジネス装置でもある。いうまでもなく、映画は物珍しい“動く画”を観ることに観客が対価を払う 興行 ところで出立したのであり、支払った対価に見合う 娯楽 を、内容を変えながら提供すること—その繰り返しによってのみ産業として成長してきた。本研究が、社会科学的なアプローチ、とりわけ映画の産業的側面に注目し、その構造的転換期の内実の解明を構想したゆえんである。

2. 研究の目的

日本映画史において **1970**年代はそれまでの制度・政策・方法・慣行が十分に機能しなくなり、それに代わる新たな動きが台頭・顕在化したという意味において最大の構造的転換期・構造的変革期をなす。本研究の目的は、この日本映画産業の **1970**年代を対象として、その社会経済的実態を次に掲げる問題群の解明を通して明らかにし、その歴史的位相を確定することにある。本研究において解明すべきは、第**1**に、大映の倒産、日活の経営危機の深化、東宝の製作部門の切り離し、松竹の製作体制の規模縮小に象徴されるスタジオ・システムの衰退・崩壊の内実とその産業史的意味についてである。映画が産業として確立して以降、製作・配給・興行部門を一体として垂直統合し、興行館における上映作品の全プログラムを特定の製作・配給会社が独占的に供給するスタジオ・システムは、幾度かの危機を経験しながらも日本においては **1960**年代まで機能してきたが、**70**年代に入ると観客層の大幅な減少と製作コストの上昇などに直面して大きく動揺し、崩壊への道を歩みだした。主要映画企業による製作部門の衰退・崩壊は、それが映画の産業としての原点であるだけに作品内容の決定から人材育成機能の消失までその影響は広範囲に及ぶ。このことの歴史的意味を、各社の個別的動向の究明を通して明らかにする。

第**2**に解明すべきは、**1976**年『犬神家の一族』をもって映画産業に新規参入した「角川映画」が採用した販売・宣伝戦略の内実とそれが日本映画業界にいかなるインパクトをもたらしたか、についてである。既存映画業界の危機を眼前にしながらか角川書店は自ら出版した原作本を映画化し、巨額の宣伝・広告費を投入して**TV**をはじめとするマス・メディアを駆使した強力な販売戦略を展開するが、関連グッズの販売にいたるその宣伝手法はアメリカで開発されたメディア・ミックスの日本的形態と評された。この「角川映画」が既存映画企

業に与えた衝撃は大きかった。何ゆえに「角川映画」は一時代を築き、今日の日本映画産業のあり方を方向づけるほどの力をもちえたのか、その根拠とその波及効果の内実を究明することは、日本映画史研究にとって喫緊の課題である。

第3に問うべきは、1960年代以降の経営環境の悪化に対して映画各社が試みた経営合理化と新たな作品路線の模索について、その実態と実際の効果である。倒産した大映は言うに及ばず、経営的には相対的に安定しているとされた東映においても、人員整理が断行され労使紛争に発展するなど、70年代は製作予算の縮小、間接費の削減、賃上げの凍結、人員整理など経営合理化の嵐が映画業界を席卷した。この経営合理化は第1の課題であるスタジオ・システムの衰退・崩壊と密接に関連している。日活の「ロマン・ポルノ」路線への転換など各社の新たな作品路線の模索・開拓もこの文脈でとらえるならば独自の相貌を呈することになる。それはまた次の第4の課題として掲げたピンク映画の隆盛と密接な関係があることは言うまでもない。

第4に明らかにされるべき課題は、1970年代に顕在化した小独立プロダクションによるいわゆる「ピンク映画」の隆盛の実態とその影響であり、日活の「ロマン・ポルノ」路線の展開もその洗練され・組織化された形態としてここで取り上げる。「ピンク映画」「ロマン・ポルノ」は既存映画各社の製作規模の縮小を尻目に一定の固定客を確保しながら、その存在を映画界に確かな形で刻み込むが、それは低予算・短期間での仕上がり、性描写の頻度などの制約を除けば、主題をはじめ作品内容が監督の自由な裁量に委ねられた結果であり、独自のエネルギーを内蔵する青春映画など新たな作品世界を切り拓く。特に注目すべきは、日活の「ロマン・ポルノ」であり、ベテラン監督が去った後、若手新人監督を積極的に登用することによって崩壊しつつあった人材育成機能を果たし、1990年代以降の日本映画の活性化を担う監督を育て上げたことである。ここではこのような多様な機能を有した「ピンク映画」の産業的実像に迫る。

最後に取り上げるべき問題は、洋画市場の拡大とそのインパクトについてである。1970年代は邦画市場が縮小する一方、洋画市場が興行収入で邦画を上回るという1980年代以降しばらく続く邦低洋高現象があらわれた時代である。もともと邦画興行館は1950年代中葉のいわゆる「戦後黄金期」においても、およそその8割が赤字経営だったが、1960年まで増加の一途をたどった後、館相互の競争の激化によって経営破綻・廃業・転業等に直面し、以降は一挙に減少に転ずる。この邦画興行館の縮小とは対照的に洋画市場が拡大するが、それは東宝東和等の戦前由来の洋画の輸入・配給会社だけではなく、戦後新たに参入した日本ヘラルドなど独立系の洋画配給会社の独特な宣伝・販売政策によるところが少なくない。ここではその宣伝・販売政策の内実を立ち入って明らかにするとともに、それが日本の映画市場にいかなるインパクトを与えたか、その波及効果の実態を地方邦画市場の空洞化現象を視野に入れながら解明する。

以上の諸課題を研究分担者間の緊密な相互連携の下に明らかにすることを通して、日本映画産業にとって1970年代とはいかなる時代であったのか、いかなる意味において構造的転換期・変革期であったのか、その歴史的位相を最深部から確定すること、これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の方法上の特徴は、既存の文献・資料の収集・解読に加えて、当該問題を中枢において担ったキー・パーソンもしくはそれに代替する当事者(複数)へのインテンシヴな聞き

取り調査によって、プリント・マターでは明らかにされえない問題の内実に深く切り込むことにある。本研究を構成するメンバーは、「研究開始当初の背景」にて述べたように、**2014**年から公的機関の研究助成に拠りながら、映画産業の製作から配給・興行に至る各現場においてそれを担った人びとへの組織的・集中的なインタビューを実施し、一部はそれを「記録集」として取りまとめてきた。これらの研究実績・研究方法上の習熟を踏まえて、キー・パーソンもしくはそれに代替する当事者への聞き取り調査を実施する。このことの重要性は、研究目的として掲げた上記**5**つの課題のそれぞれが、それを担った当事者の強力なリーダーシップの解明なしには遂行しえないところからも明らかである。

4. 研究成果

1960年代末～**1970**年代にかけては日本映画産業界にとって構造的変革期であり、既存邦画五社が衰退する一方、角川映画に代表される新規参入者により新しい才能が市場に出て活性化した。大映の倒産・日活のロマン・ポルノへの転換に代表される**1960**年代末における古い日本映画界の衰退と、角川映画やサンリオの映画製作への進出に代表される**1970**年代初めの日本映画界の新しい動きについては、これまで日本映画史の言説の中でそれぞれの個別事例は語られては来たものの、二つの時期の継続性について積極的には評価されてこなかった。この変革期に映画業界に様々な立場に関わった当事者**15**名に対し共同インタビューを行なうことにより、古い時代の仕組みが滅び一方で、旧体制の中で育った人材の技術力が新規参入者たちの映画作りで活用されていくダイナミズムを検証することが出来た。

具体的には、**2019**年度については岡田裕氏（元日活プロデューサー）、宮島正弘氏（元大映撮影部）、園井弘一氏（京都映画所属の編集者）の**3**名へのインタビューを行ったほか、メンバーによる個別インタビューとして宮崎博氏（東映京都撮影所所属俳優）へのインタビューを行った。**2020**年度からは新型コロナ感染拡大の状況によって当初予定通りの研究会の開催・共同インタビューは行えない状況ではあったが、**2020**年度は、代表者のみがインタビューに対面して残りのメンバーは**ZOOM**による参加という形式で実施するオンライン研究会を宮田滋禮氏（元映写技師）、原将人氏（映画監督）に対して実施した。**2021**年度は、大場正敏氏（川喜多映画記念館顧問）、増田弘道氏（元キティレコード）、中島賢氏（元大映九州支社宣伝部）へのインタビューを同様の形で行なった。最終年度である**2022**年度は、当初予定では第三年度までに完了していたインタビューをベースに成果を取りまとめて論考集のための研究会を実施していく予定だったが、新型コロナ感染拡大の影響を受けて**3**年間トータルでのインタビュー実施人数が**9**名に留まっていたこともあり、引き続き研究会において共同インタビューを実施することとした。代表者のみが対面で、残りのメンバーとは**ZOOM**で繋ぐ形でのインタビューとして坂上直行氏（元・日本 Herald 映画宣伝部）、檜垣紀六氏（映画デザイナー）、班単位の小規模なインタビューとして村山英世氏（記録映画保存センター事務局長）、森脇清隆氏（京都文化博物館学芸課映像情報室長）、および対面でのインタビュー（一部、地方在住メンバーは**ZOOM**参加）として浜野佐知氏（映画監督）、白川和子氏（映画女優）の計**6**名へのインタビューを実施し、**4**年間トータルとして**15**名へのインタビューを積み重ねた。また、並行して、インタビューのない時にも同様の**ZOOM**での研究発表の機会を設けることで、論考集に各自が執筆してもらう論考のアイデアについてメンバー間で議論を重ねた。

それらのインタビューを通じてメンバーに知覚された、この時期の日本映画界の「古い時

代の仕組みが滅ぶ一方で、旧体制の中で育った人材の技術力が新規参入者たちの映画作りで活用されていく「ダイナミズム」のありようを全体として言うならば、技術革新により旧体制と共に滅んだ仕組みがある一方で、人的継続性が担保されたことでその後の新たな日本映画界への技術の継承が行われた事が確認されたといえる。

その成果は、インタビュー集『映画人が語る日本映画史の舞台裏【構造変革編】』（仮題）および論考集『映画の生き残り戦略——異業種参入・デジタル化・アーカイヴィング』（仮題）として刊行予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 木村智哉	4. 巻 23巻1号
2. 論文標題 アニメーション産業史研究はいかにして / 何が可能か：方法論と意義についての学際的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『アニメーション研究』	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2022-12
2. 論文標題 三宅唱、あるいは映画における手話の聴覚性について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 114-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2023-1
2. 論文標題 ゴダール映画のサウンドトラック ジョン・ゾーンの初期作品をネガとして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 416-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 花田史彦	4. 巻 53号 2022-8
2. 論文標題 日本メディア論の胎動 今村太平『映画芸術の形式』をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 メディア史研究	6. 最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2021-12
2. 論文標題 肉とノイズ フレデリック・ワイズマン映画の音風景	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 450-465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2022-9
2. 論文標題 アピチャップンの耳、『MEMORIAメモリア』の音	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 60-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 第9号
2. 論文標題 『ありがとう』の女たち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教映像身体学研究	6. 最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田史彦	4. 巻 117号 2021-5
2. 論文標題 民間学を継承する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 189-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤和都	4. 巻 2号
2. 論文標題 レンタルビデオ店とデータベース 雑誌「ビデオでーた」を介した大規模店舗の利用実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メディアム	6. 最初と最後の頁 42-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村智哉	4. 巻 21巻
2. 論文標題 「研究史料の翻刻と解題 東京都労働委員会 高畑勲証言速記録より」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アニメーション研究』	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 第11号
2. 論文標題 映画音響理論はどこまでミュージック・ビデオを語れるか 宇多田ヒカル『Goodbye Happiness』を例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『エクリヲ』	6. 最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2019年8月号
2. 論文標題 『楊貴妃』の声 京マチ子 / 溝口健二 / 早坂文雄	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 152-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長門洋平	4. 巻 2019年7月臨時増刊号
2. 論文標題 Inside-Looking Out 萩原健一の起点とGS / 映画	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村大志	4. 巻 30巻3号
2. 論文標題 北出真紀恵著『「声」とメディアの社会学』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『社会学 評論』	6. 最初と最後の頁 287-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田史彦	4. 巻 第113号
2. 論文標題 帝国日本を内破するメディア論ー映画評論家・今村太平に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田史彦	4. 巻 第241号
2. 論文標題 「評論家」と「評論」と歴史研究」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本教育史往来』	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保 豊	4. 巻 43号
2. 論文標題 毒久しく咲く薔薇の政治性 1990年代の小林悟作品に見るHIV/エイズに対するスティグマの可視化と無縁化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『演劇研究』	6. 最初と最後の頁 83-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川翔太	4. 巻 vol. 15
2. 論文標題 Ticklish Contact Zones: Colonial, Inter-Imperial, and Trans-Pacific Encounters In/Around the Japanese Empire	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Media Fields Journal	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木村智哉
2. 発表標題 アニメーション産業史の視点と意義
3. 学会等名 日本アニメーション学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 花田史彦
2. 発表標題 ヤクザと教育 佐藤忠男『長谷川伸論』の射程
3. 学会等名 日本社会教育学会 第69回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村智哉
2. 発表標題 サンリオの映画事業とその時代
3. 学会等名 科研費基盤研究(C)「日本のファンシーをめぐる1970年代の女性文化再編の研究 サンリオを中心に」オンライン研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ
2. 発表標題 ワークショップ「映像アーカイブの未来を考える」
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長門洋平
2. 発表標題 「大谷巖特集 音の世界」
3. 学会等名 日本映像学会関西支部第41回夏期映画ゼミナール
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 花田史彦
2. 発表標題 「知識人」に「転職」する――評論家・佐藤忠男の思想と行動
3. 学会等名 同時代史学会第27回関西研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保 豊
2. 発表標題 1980から1990年代における薔薇族映画の映画史的可能性 小林悟旧蔵資料を使って
3. 学会等名 日本映画学会第8回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 筒井清忠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 349
3. 書名 昭和史講義【戦後文化編】(下)	

1. 著者名 永田大輔・近藤和都・溝尻真也・飯田豊	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 260
3. 書名 ビデオのメディア論	

1. 著者名 木村智哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 368
3. 書名 東映動画史論	

1. 著者名 谷川建司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 424
3. 書名 映画産業史の転換点 経営・継承・メディア戦略	

1. 著者名 谷川建司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 376
3. 書名 映画人が語る 日本映画史の舞台裏 [配給興行編]	

1. 著者名 谷川建司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 400
3. 書名 映画人が語る 日本映画史の舞台裏 [撮影現場編]	

1. 著者名 板倉史明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 神戸新聞総合出版センター	5. 総ページ数 368
3. 書名 『神戸と映画 映画館と観客の記憶』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小川 順子 (OGAWA naoko) (00414029)	中部大学・人文学部・教授 (33910)	ピンク映画版班長
研究分担者	小川 翔太 (OGAWA shota) (00800351)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	ワダ・マルシアーノ ミツヨ (WADA MARCIANO mitsuyo) (10796238)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	アーカイヴス班班長
研究分担者	須川 まい (SUGAWA mati) (10814832)	流通経済大学・社会学部・准教授 (32102)	
研究分担者	近藤 和都 (KONDO kazuto) (10830359)	大妻女子大学・社会情報学部・准教授 (32604)	
研究分担者	西村 大志 (NISHIMURA hiroshi) (20341224)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授 (15401)	モノから見る映画史班班長
研究分担者	板倉 史明 (ITAKURA shiro) (20415623)	神戸大学・国際文化科学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	長門 洋平 (NAGATO yohei) (20632334)	立教大学・現代心理学部・助教 (32686)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北浦 寛之 (KITAURA hiroyuki) (20707707)	開智国際大学・国際教養学部・准教授 (32524)	
研究分担者	木村 智哉 (KIMURA tomoya) (30636030)	開志専門職大学・アニメ・マンガ学部・准教授 (33116)	スタジオシステム・経営戦略班班長
研究分担者	久保 豊 (KUBO yutaka) (30822514)	金沢大学・歴史言語文化学系・准教授 (13301)	
研究分担者	木下 千花 (KINOSHITA chika) (60589612)	京都大学・人間・環境学研究所・教授 (14301)	
研究分担者	小川 佐和子 (OGAWA sawako) (90705435)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鷺谷 花 (Washitani hana)	一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・特別専門員	
研究協力者	花田 史彦 (Hanada Fumihiko)	立命館大学・産業社会学部・授業担当講師	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	一藤 浩隆 (Ichifuji hirotaka)	広島大学・人間社会科学研究科・客員准教授	
研究協力者	伊藤 弘了 (Ito hironori)	熊本大学・文学部コミュニケーション情報学科・准教授	
研究協力者	石橋 佳枝 (Ishibashi yoshie)	テンプル大学ジャパンキャンパス・大学院教育学研究科大坂センター・職員	
研究協力者	岸本 通彦 (Kishimoto Michihiko)		所属なし

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関